

軍官七期生

シベリア地区死亡者数

| 連 | 区 | 総員 | ブカチャ | イルクーツ | 朝鮮俘 | 単独行 | ブカ死 | 刈 | ヒロ | ペト | ネバ | 他 | 死計 |
|----|---|-----|------|-------|-----|-----|-----|---|----|----|----|---|----|
| 5 | 1 | 32 | 22 | 7 | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 1 | | 1 | 8 |
| | 2 | 31 | 17 | 7 | | 7 | 3 | | | | | | 3 |
| | 3 | 31 | 23 | 1 | | 7 | 4 | | | | | | 4 |
| | 4 | 31 | 20 | 10 | | 1 | 8 | 1 | | | 1 | | 8 |
| | 5 | 31 | 14 | 13 | | 4 | 3 | | | | | 1 | 4 |
| | 6 | 32 | 20 | 7 | | 4 | 5 | | 3 | | | 1 | 9 |
| 小計 | | 188 | 116 | 45 | 1 | 25 | 26 | 2 | 5 | 1 | 1 | 3 | 36 |
| 6 | 1 | 32 | 16 | 10 | 1 | 5 | 3 | | | 1 | | 1 | 5 |
| | 2 | 31 | 25 | 0 | 1 | 5 | 10 | | 1 | 2 | | | 13 |
| | 3 | 31 | 22 | 5 | | 4 | 10 | | | 1 | 1 | | 12 |
| | 4 | 31 | 19 | 8 | | 4 | 3 | | | 1 | | | 4 |
| | 5 | 31 | 23 | 3 | | 5 | 6 | | 2 | 1 | | | 9 |
| | 6 | 32 | 14 | 10 | 1 | 8 | 2 | | 1 | 2 | | | 5 |
| 小計 | | 188 | 119 | 36 | 3 | 31 | 34 | | 4 | 8 | 1 | 1 | 48 |
| 合計 | | 376 | 235 | 81 | 4 | 56 | 60 | 2 | 9 | 9 | 2 | 4 | 84 |

平成3年8月作成 杉村俊一

① シベリア慰霊行総括
杉村 俊一 記

別掲の表の通り、敗戦時、軍官学校
7期生375名は、ブカチャーチャ抑留者
235名、イルクーツ抑留者81名、単独
行動を余議なくされた者59名に大別さ
れ、外地に於て、夫々83名、3名、16
名の同期生を喪ったが、シベリアのみ
で見ると表の通りとなる。イルクーツ
ク地区オルハ村の1名を除く83名がブ
カチャーチャ抑留者であり、病弱者と
して数カ所へ転送され、或はその途中
で斃れたのである。

1 概 況

多数の仲間・同期生を喪った俣、亡骸を見捨てて立去った者として、再訪し、事実を再確認し、遺骨を故里へ帰還させる、墓を建てる、何とか慰霊をせねばならない。此の憶いは多年、胸中に蟠踞存在していた。ソ連の変化が、旅行立入禁止区域の壁を崩し、憶い出の地への訪問を可能にした。主力を喪ったブカチャーチャを始め数カ所の友が眠る所、43年の時間経過を考えると、焦燥の気持だけで対処はできない。

今回、ヤゴダ会墓参調査団として19名(団長・三枝信義氏 Ⅱ 弁護士 Ⅱ 軍校7期6―2区隊長 Ⅱ 56期)、財団法人全国強制抑留者協会調査団第3班に6名・7月、8月と2回に分け目的地ブカチャーチャ一本松墓地他一カ所、カリムスカヤ一八四一野戦病院墓地、ヒロク一九三七野戦病院墓地他一カ所、ペトロフスク一四八四野戦病院墓地、チタ市カダラ岡の上墓地、ザソブカ東方第一墓地、ゴロブスコエ第二墓地、イルクーツク南方オルハ村墓地、イルクーツク市内日本人墓地、ハバロフスク市内日本人墓地の12カ所を探ねた。ブカチャーチャ一本松墓地と、チタ市内、イルクーツク市内、ハバロフスク市内の半ば観光化した所を除き、現地人も良く判らず、探し回り、歩き回り、車で山から山へ走り回る調査行だった。

チタ州では、国際赤十字社チタ支部のスイチョフという戦後生れの男が執所を発見した。彼が作成した文書・地図も周辺の状況が記載されて居らず墓地に関する事のみであったので、彼が一緒に来なければ判らないという事も少くなかった。然し、僥倖に続く僥倖で目的地には辿り着けただけでなく、

新しい予期せぬ発見もあった。事前調査や現地での交渉の及ぶ所でない事実の連続は、唯々、彼の地に眠る、嘗て見捨てられ、置き去りにされた友、同期生、英霊の招きとしか考えられない。戦友は招んでいる。待っていたのだ。夫々の場所で慰霊の行為をし、現地の人達と一緒に供養し、再訪を誓い、その為の地図を作成した。

2 ブカチャーチャ

ブカチャーチャ一本松墓地は、目標の一本松はなく、唯、株だけが在った。周辺に眠る約600の墓はその低、低い凹凸のあるなだらかな草原の呈をしていた。放牧地とされ、野焼きが行われていたので、一本松も失われ、他の樹木も生えなかった。各所に石炭を燃やして、地表を燐め埋葬した当時を想わす物が散見できた。2・3人が掘り出すと、忽ち、小円匙の頭部だけの深さから2遺体を発見した。私達は戦友の眠る土の上で慰霊行為をしたのだった。嗚咽、現地の人達まで一緒に、自分自身の肉体がどうしたのか、何ともいえぬ脱力感。天を仰いで歩き回る者、坐り込む者もいた。